

チョウゲンボウ



北方にて

(撮影：桐原佳介)

■小さなハヤブサ長元坊

「はやぶさ」と聞くと、最近では「小惑星探査機はやぶさ」が一気に知名度を上げました。他にも列車の名前やオートバイの名称などにも使われたりと、人気の高いハヤブサ。しかし、このチョウゲンボウはハヤブサ類の中でも小柄で、大きさはハトより少し大きいくらい。黒い

大きな目が愛らしくもありません。大好物は、ネズミや小鳥、たまには昆虫も食べることがあります。南部町では寒い季節に姿を見かけるようになります。名前の由来は、南北朝時代の僧侶の名から付けられたという説もあります。

■都会では増えているのに

ハヤブサの仲間と聞くと、数が減少している希少種という印象があります。しかし、実はチョウゲンボウは、現在都市部に進出してアーバンバード(都市鳥)となりつつあります。ビルや鉄骨の隙間で子育てをし、スズメなどを主食にして、したたかに都会の環境へ順応しているようです。一方、田畑や森が多い緑豊かな里山の南部町では、チョウゲンボウを見かけることが、他の猛禽類よりも少ない気がします。彼らの好む餌は多くあると思うのですが、鳥の観察を続けている私達にとっては、とても不思議に思います。

■オスとメスは衣装が違う

チョウゲンボウは、タカやハヤブサの仲間では珍しく、見かけでオスカメス、もしくは若鳥と見分けやすい野鳥です。成鳥のオスは頭と尾羽に青みがかった灰色です。写真のチョウゲンボウは、茶色いのでメスカ若い鳥です。私たちの経験では、これまで町内では、このメスカ若い鳥の観察ばかりで、オスの美しい姿はなかなかお目に書かれません。

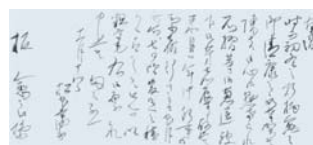
■田畑の守り神

田畑を荒らすネズミやスズメを退治してくれる生き物は、昔から農耕を守る神様として祀られてきました。いにしへの先祖が、キツネやフクロウ、ヘビ、タカなどを身近な存在として共に暮らしてきた様子が伺えます。田畑を守っているとも言えるチョウゲンボウにとっても、もっと住みよい町になればと思います。

自然観察指導員 桐原真希

祐生会いの館【緑水湖畔】インフォメーション

昭和2年8月16・17日の2日間、米子朝日座で「東西合同大歌舞伎」が行われました。松竹の作家三浦おろち氏のはからいで、楽屋において松本幸四郎と面会しました。幸四郎は扮装中にもかかわらず、親しく話しかけてくれました。「私の最も感じたことは、その態度の寸分の隙間なき事。悠々として迫らざる態度にて、充分に名優の真価を肯定せしむる」と感激しています。次の日には、松王丸の紅隈に署名を添えていただきました。この感動を『紅隈歓語』として本にまとめ、松本幸四郎に送ったところ返信がありました。現在「懐かしの興行ポスター展」で展示しています。※「懐かしの興行ポスター展」は1月28日まで開催中です。ぜひお出かけください。



▲松本幸四郎からの手紙 朝日座でいただいた紅隈と署名▲

■開館時間：9時～17時 ■休館日：毎週火曜日 ■問合せ先：☎66-4755